

平成 25 年度 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 成果報告書
【インクルーシブ教育システム構築モデルスクール】

教育委員会名	出雲市教育委員会
--------	----------

概 要

モデルスクールの概要（平成 26 年 1 月 31 日現在）

	モデルスクール名	幼児児童生徒数	教職員数
1	出雲市立中央幼稚園	87 名	21 名

【事業概要】

1. モデルスクールの特色（特別支援教育に関する事項）

障害のある幼児への早期からの支援体制の構築は極めて重要な課題であると考えており、出雲市立中央幼稚園をモデルとして、就学を見据えた適切な合理的配慮の在り方について考察し、市内全域での特別支援教育の推進につなげていきたいと考えている。

本園は、特別な支援が必要な園児（以下「対象児」という。）に対して、担任とは別に担当教諭を配置し、きめ細やかな個別の支援を行っている。これまで積み上げてきた支援や取組を、対象児の教育的ニーズや障害特性に応じた「合理的配慮」として整理するとともに、保護者や関係機関とも一層緊密な連携を図りつつ、インクルーシブ教育システム構築に向けた園内の支援体制整備や教職員の専門性の向上を図ることにした。

2. 取組の概要

【教育委員会がモデルスクールに対して行った取組及び支援】

特別支援教育の専門性が高い講師を招き、インクルーシブ教育システム構築に向けた昨今の動きを含めた特別支援教育に係る研修会などを、複数回開催した。実際の保育の場での事例等も交えながら、障害のある幼児への効果的な支援方法について御指導いただき、教員の専門性の向上を目指した。研究授業も実施して、指導内容や支援方法について、講師の指導のもと研究を深めた。

【モデルスクールとして行った取組】

担当教諭は、日々の保育の様子を記録するだけでなく、担当教諭の対象児への関わり方、対象児が示した反応、担当教諭が感じた気づきなどについても記録するように心掛けた。これらの記録をもとに園内研修を実施し、専門家や合理的配慮協力員の指導・助言を受けながら、対象児に対する合理的配慮の内容の評価及び検証を行った。

個別の指導計画を作成し、学級担任と担当教諭が常に連携をとりながら、対象児の支援に従事した。また、園内での対象児の様子については、他の教職員にも情報提供し、園全体での共通理解のもと、対象児のニーズや障害特性に応じたきめ細やかな支援体制の構築を目指した。

合理的配慮協力員は、本園での指導・支援状況を参観し、専門的かつ実践的な指導・助言を行った。

対象児への合理的配慮の内容を検討する際の参考として、障害のある幼児の育児経験のある保護者の体験談や、医療・保健などの関係機関の情報も収集して、対象児の将来を見据えた支援を実施していくために必要なポイントが何であるかを考察し、よりよい支援に結びつけていけるように留意した。

3. 成果及び課題

【成果】

出雲市立中央幼稚園は、特別な支援が必要な園児の受入れをこれまでも行ってきたが、今回の事業をきっかけに、幼児一人一人のニーズを踏まえた支援の重要性について改めて認識を深めることとなった。日々の保育の中に様々な工夫を取り入れて、個のニーズに応じた合理的配慮を実践することは、幼児の成長につなげることができただけではなく、自らの指導力に対する教員自身の自信にもつながっていった。

こうした指導力の向上には、専門家や合理的配慮協力員の指導・助言を定期的に受けることができたことが大きい。専門的な見地に基づく助言を受けることは、教員にとっての新たな気づきにつながり、よりよい支援方法の実践に結びついた。

個別の指導計画とは別に、担当教諭が対象児への関わりの中で感じたこと、あるいは対象児が示した反応や様子なども細かく記録していったことは、教職員間での情報共有に役立ただけではなく、担当教諭自身の成長の記録にもなり、支援方法の振り返りなどにも役立てることができた。

対象児が幼稚園で安心して過ごし、身の回りの様々なものに興味をもち、意欲をもって園内での活動に取り組んでいけるようにするためには、担当教諭との信頼関係が大切である。また、他の園児は、担当教諭が対象児とかかわる姿を目にして、次第に対象児の存在を柔軟に受け止めるようになり、対象児の思いを感じとろうとしたり、積極的に関わろうとしたり、手助けしたりするようになり、インクルーシブ教育システムあるいは共生社会の理念を自然な形で理解することができたように思われる。

【課題】

合理的配慮の内容や効果的な支援方法は、対象児ごとに異なる。つまり、別の幼児で効果的だった指導方法が、誰にでも効果的であるとは限らない、といった難しさがある。しかしながら、実践事例を積み上げることで、これまで研究してきた合理的配慮をうま

く組み合わせるなどして、それぞれの対象児への理解を深め、きめ細やかな支援に結びつけていくことはできるので、一人一人の存在を大切にした保育を着実に実践していきたい。言葉や行動でうまく思いを表現できない幼児の内面に常に気を配り、共感し、理解しようとする気持ちを大切にしたい、あたたかい保育を今後も継続していきたい。

また、就学先の小学校等との連携も強化しながら、対象児に対する一貫した支援につなげていくための仕組みづくりについても、引き続き検討していく必要がある。